

主 題：主に喜ばれる歩みのための祈り①

聖書箇所：コロサイ人への手紙 1章9節

テーマ：主に喜ばれる歩みを続けていくのに欠かせない要素とは何か？

今朝も続けてコロサイ人への手紙1章のみことばを学んでいきます。きょうから1：9－14を一緒に考えていきたいと思います。この部分では、著者であるパウロがした、コロサイの教会に対する自分の祈りを記していました。愛する兄弟姉妹たちが、主に喜ばれる歩みを続けていくようにと祈っていました。どんな内容が記されているのか、まずはいつものようにみことばをお読みしたいと思います。

コロサイ1：9－14

「：9 こういうわけで、私たちはそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみことばに関する真の知識に満たされますように。：10 また、主にかなった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられますように。：11 また、神の栄光ある権能に従い、あらゆる力をもって強くされて、忍耐と寛容を尽くし、：12 また、光の中にある、聖徒の相続分にあずかる資格を私たちに与えてくださった父なる神に、喜びをもって感謝をささげることができますように。：13 神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。：14 この御子のうちにあつて、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ています。」

さて、これまでの流れを改めて思い返してみてください。先週まで私たちは数回にわたって、3－8節の部分を考えてきました。そして私たちはその部分に、コロサイの教会のことで感謝をささげているパウロの姿を見ることができました。パウロは神様に心から感謝していました。それはエパfrasからの報告で、コロサイの兄弟姉妹たちが神様に喜ばれる教会として歩んでいると知ったからでした。何度も言いますが、パウロは実際に彼らに会ったことはありませんでした。彼らの歩みを直接見たわけでもなかったのです。しかし、彼らのうちに福音の力が確かに働いていて、信仰と愛と希望といった、救われている者に見られる特徴がはっきりと生み出されていることを知らされ、パウロは大いに喜んでいました。世界じゅうでも実を結び、広がり続け、コロサイの兄弟姉妹のうちにも実を实らせていた福音の力、それがなんて偉大な力なのだと、彼は神様の働きに感謝していたのです。

パウロは、コロサイの兄弟姉妹の忠実な歩みによって励ましを受けていました。そしてそんな励ましを受けていた彼が、続けて9節のところから彼らのために祈っているのです。いったいどんなことを祈ったと思います？それは救われている彼らが、継続して主に喜ばれる者として歩んでいくことでした。神様に喜ばれる群れとしてもうすでに生きていた彼らが、コロサイの教会がその状態で満足してしまったり、立ち止まったりすることなく、ますます主に喜ばれるものとなっていくことをパウロは祈っていたのです。このように9節は始まっていました。「こういうわけで、私たちはそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。」と。パウロはエパfrasから彼らの歩みを聞いたその日から、そのことを祈り続けていました。彼らが成長していくことを祈り求めていたのです。もちろん彼はコロサイ教会が抱えていた問題もよくわかっていました。前にも見たように、彼らの間で誤った教えが広がり始めていて、信仰の土台が揺るがされていることも耳にしていました。キリストのことを否定して、キリストだけでは不十分だという間違った考えによって、混乱が生じていることも理解していたのです。でもだからこそ、パウロはコロサイの信仰者たちがいろいろな危険や誘惑に負けることなく、ますます成熟した者となっていくことを願っていました。今持っている信仰や愛や希望、それに満足して立ち止まるのではなくて、主に喜ばれる者として続けて成長していくことを祈り求めていたのです。

そしてこれは、今の私たちにとっても大切なことは言うまでもありません。私たちのことをただ恵みによって救ってくださった神様は、私たち自身が神様を喜ばせる者へと変えられていくことを求めておられるのです。救われてそれで満足です、あとはもう自分の好き勝手に生きていく……ではありません。私たちはすでに何らかのゴールに到達しているのでもないし、信仰者は例外なく罪を脱ぎ捨てて、キリストに似た聖い者へと変えられていくという、そんな信仰のレースを今走っているのです。救われているのであれば、みんな同じレースを走っています。かつてパウロ自身も、自分の歩みについてこう述べていました。ピリピ3：13-14に「:13 兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕らえたなどと考えるはけません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、:14 キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。」と。あのパウロもひたすらに前を目指して走っていました。ヘブルの著者も12：1で「こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。」と教えていました。いろいろな誘惑や危険は確かにそこにあります。罪との葛藤を経験して、悲しいことに、時にそれに敗北してしまうこともあります。しかし、それでもなお私たち自身も主に喜ばれる者として、神様の助けを祈り求めながら、信仰の成熟を目指してますます進んでいこうとするのです。それが信仰者の歩みでした。

さて、少しここで立ち止まって考えてみてください。私たちはその大切さを確かによく知っています。キリストに似た者へと変わっていくために、私たちが走り続けていくこと、その責任も知っています。でも実際に、私たちが主に喜ばれる者として成長していくというのは、どんな者へと変わっていくことを言うのでしょうか？ 私たちは、どんな者へと変えられていくことを具体的に目指していくのでしょうか？ そもそも主に喜ばれる歩みとはいったいどのようなものなのでしょう？ その答えは、パウロの祈りのことばから見ていくことができます。パウロは信仰者として生きていたコロサイの兄弟姉妹たちがますます主に喜ばれる者として歩んでほしいと神様に祈っていたのです。そんな成長を願うパウロの祈りのうちに、特に主に喜ばれる歩みに欠かすことのできない六つの要素というものを見て取ることができます。

これから私たちは、少し時間をかけて、それぞれの要素を見ていきたいと思えます。そして見ていく中であって、ぜひ自分自身の歩みと照らし合わせてみてください。自分自身のこととして一緒に考えてみましょう。私たち自身も、今ますます主に喜ばれる者として成長し続けていこうとしています。私たちがみことばが教えているその姿に近づこうとしているのかどうか、そのことをよく考えてみましょう。その助けと励ましになることを心から祈っています。

●パウロの祈りの姿勢 9 a 節

それら六つの要素を考えていく前に、少しパウロの祈りそのものに目を向けてみましょう。彼の祈りの姿勢について、私たちは9節の初めにそれを見て取ることができます。9節の初めに「こういうわけで、私たちはそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。」と、パウロの祈りの姿勢が描かれていました。これがパウロの祈っていた姿でした。先ほども触れたように、コロサイの教会に関するエパフラスの報告を耳にして以来、パウロは彼らのために絶えず祈っていたのです。

ここでまず注目してほしいのは、この「祈り求めています」と訳されていることばです。日本語だと一つのことばに見えるかもしれませんが、実はパウロはここで二つのことばを用いていました。「祈る」ということばと「求める」ということばです。まず「祈る」ということばは、パウロの書簡の中で最も一般的に使われていたことばで、文字どおり神様に向かって祈ることを意味していました。でもそれに続いて出てきていた「求める」ということばは、「祈る」ということばよりも、もっと具体的なことばでした。「何かを明白にへりくだって要求する」ことを意味していました。単に「祈る」ことより

も、「求める」ということに強調の意味があるのです。つまりパウロは神様に向かってただ祈っていたのではなく、何かを明白にへりくだって求めていた、訴えていたのです。

パウロは、忠実に歩むコロサイの兄弟姉妹たちの姿を覚えて、神様に向かって祈り求めていたのです。言いかえれば、パウロはそれだけこの兄弟姉妹のことを気にかけていたということです。彼らのことを思って、熱心に神様に祈っていたということです。単に祈っていたわけではありません。祈り求めていたのです。パウロは喜ばれる者として歩んでいるという彼らの様子を聞いて、神様に向かって感謝して、そして彼らのために絶えず祈りを熱心にささげていました。エパfrasから彼の元に、彼らが神様に喜ばれる者として歩んでいるという報告が届いたときに、どれだけパウロは喜んだことでしょうか。そして喜んだパウロは、感謝にあふれて、いかに熱心に彼らのために祈ろうとしていたのでしょうか。そうして、神様に感謝をささげて、ほかの兄弟姉妹のことを心から祈るという人物、それがまさにパウロでした。ほかの手紙の中でも、同じような姿を見て取ることができます。例えばエペソ1：15－16で彼は「:15 こういうわけで、私は主イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対する愛とを聞いて、:16 あなたがたのために絶えず感謝をささげ、あなたがたのことを覚えて祈っています。」と祈っていました。どこかで見たようなことばが並んでいましたよね？同じようにパウロは、感謝をささげて祈っていました。同じようにピリピ1：3－5にも「:3 私は、あなたがたのことを思うごとに私の神に感謝し、:4 あなたがたすべてのために祈るごとに、いつも喜びをもって祈り、:5 あなたがたが、最初の日から今日まで、福音を広めることにあずかって来たことを感謝しています。」とありました。パウロは感謝をささげ、同時に祈り続けていました。

こんな姿勢から私たちが多くのことを学ぶことができます。いろいろなことを見て取ることができます。一つ私たちが覚えられることは、パウロの祈りというのは、必ずしも何かしらの問題が生じたからささげられるものではなかったということです。パウロの祈りというのは、試練や危機が起こったときだけ、何らかの必要が生じたときだけささげているものではありませんでした。彼は忠実に歩もうとしている兄弟姉妹のことを覚えたときに、そしてまたそのうちに働いている神様を覚えたときに、その感謝に動かされて熱心に祈っていたのです。彼の動機は感謝でした。自分自身の祈りの生活を少し考えてみましょう。果たして私たちはどんなときに祈りをささげているのでしょうか？どんなことを普段祈っているのでしょうか？もちろん私たちはどんなことであろうと神様に祈ることはできます。日々の歩みの中にあって、苦しみや難しさを覚えるときに、いろいろなチャレンジを受けるときに、神様に正直にそれを打ち明けて、すべてを委ねることもできます。どんな状況に置かれようとも主権者なる神様に拠り頼みながら生きていくことができるというのは、私たちに与えられている大きな喜びです。私たちに与えられている大きな特権です。でも果たして私が祈りをささげるのは、そんな必要を覚えたときだけになっていないでしょうか？家庭や職場において、何かしらの困難が生じたときだけ、神様に頼っていたりしないでしょうか？何より私たちが祈っていることはどんなものでしょう？祈ることのほとんどが「何かをしてください」とか、「これを与えてください」とか、「この問題をどうにかしてください」になっていないでしょうか？また、今私たちが見たように、パウロはほかの兄弟姉妹のことに心を留めて、関心を払い、祈っていました。私たちの祈りはどれだけほかの兄弟姉妹のことに関心を払ったものでしょう。同じ主を愛して歩んでいる者たちのうちに働いている神様に感謝して、私たちが祈りをささげたのはいつが最後でしょうか？ほかの兄弟姉妹の忠実な歩みを見て、私たちが神様に感謝をささげる、そんな祈りをささげたのはいつが最後でしょうか？私たちはどんなときも祈りをささげることができます。必要を覚えているときにも祈ることができるし、そうでないときも同じです。ほかの兄弟姉妹の成長のために、私たちは心を配って祈り続けていくこともできます。そしてそれは、ほかの人たちが苦しんでいるときだけではなく、病気や罪といったさまざまな問題があるときだけでもありません。もちろんそのときに祈ることもできます。でも、私たちはほかの兄弟姉妹たちが神様の前に喜ばれる者として歩んで

いるときも一緒に喜びをもって、その人のために祈り続けることができるのです。ますますその人が神様に喜ばれる者として歩いていくことができるようにと私たちはお互いに祈ることができるということです。パウロは自分自身のことだけではなくて、ほかの兄弟姉妹のうちに働かされている神様の力にいつも感謝をささげて祈っていました。

では私たちはどのように祈るでしょう？ 私たちも兄弟姉妹の成長をともに喜んで、励まして歩いていくことができます。パウロはそう祈っていたのです。それが彼の祈りの姿勢でした。

○主に喜ばれる歩みのために：欠かせない六つの要素

1. 神のみこころに関する知識に満たされること 9 b 節

さて、今、私たちはパウロの祈りの姿勢を見ましたが、ここからは実際に祈りの内容に入っていきます。パウロはコロサイの人々が主に喜ばれる歩みをする者へと成長し続けていくために必要な六つの要素を挙げていました。きょうは六つあるうちの一つしか見ませんけれども、その一つ目の要素が9節の後半部分に「どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように。」と記されています。一つ目の欠かせない要素は「神のみこころに関する知識に満たされること」でした。パウロはそうやって愛する兄弟姉妹たちがますます神のみこころに関する知識に満たされるようにと祈っていたのです。これはいったいどういうことなのでしょう？このことを考えていくために、今、私たちが読んだこの祈りの部分を細かく分けて一緒に考えてみましょう。

▷「満たされますように」

まず初めに注目してほしいのは、パウロは最後に「満たされますように」という動詞を用いていました。「満たされますように」ということばには、もともと「何かをいっぱいにする」とか、「完全に埋め尽くす」といった意味が含まれています。容易に想像できると思いますけれども、水を注いでいっぱいになってしまったコップ、もうこれ以上は何も入れることができない、何も注ぐことができない、そんな状態をこのことばは表しています。でも同時に、この「満たす」ということばには、いっぱいにするという意味から派生して、ある別の意味が聖書の中で用いられることもありました。どんなふうに使われていたのか、具体例を見て考えてみてください。例えば、ルカ6章で安息日にイエス様が病気の人を癒すかどうかをじっと見ていた律法学者とパリサイ人に使われていました。イエス様と彼らの間でのやり取りが6：9-11に、「：9 イエスは人々に言われた。「あなたがたに聞きますが、安息日にしてよいのは、善を行うことなのか、それとも悪を行うことなのか。いのちを救うことなのか、それとも失うことなのか、どうですか。」：10 そして、みなの方を見回してから、その人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。そのとおりにすると、彼の手は元どおりになった。：11 すると彼らはすっかり分別を失ってしまって、イエスをどうしてやろうかと話し合った。」と書かれています。さて、「満たす」ということばはどこにもありませんと思った人もいるかもしれませんが、この箇所ですっかり分別を失ってしまってと訳されているこのことばを直訳すると、「怒りで満たされてしまって」と訳することができます。つまり、このときの律法学者たちの内側というのは、イエス様に対する憤りでいっぱいになっていたということです。彼らの心は、ほかの思いやほかの感情が入る隙間が1ミリもないほど怒りで埋め尽くされていたと言うのです。ここで皆さんに気づいてほしいのは、そんな怒りで満たされていた彼らがどんな状態になっていたかということです。彼らは憤りによって分別を失っていただけではなくて、イエス様をどうにかしてやろうと策略を練っていました。言いかえれば、彼らは怒りによって完全に支配されていたということです。そして怒りによって支配されていた彼らは、結果として、誤った行動をとるようになっていました。そしてこれが「満たす」のもう一つの意味でした。このことばは、「何かによって支配されること」、「内側に満ちているものにコントロールされること」を表していました。律法学者たちのうちには怒りが満ちていました。怒りによって支配されていたのです。怒りによって支配されている人は、そこでとどまるのではなくて、

誤った行動を生み出します。イエス様をどうにかしてやろうと話合っていたのです。支配されているものによって、行動が生み出されていくのです。

これ以外の箇所でも、その様子を見て取ることができます。例えば、今度はよい例ですけれども、使徒4：31では「彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が震い動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語りだした。」と書いていました。ここでは何によって満たされていたかということ、聖霊によって満たされていたことがはっきりと見て取れました。そうしたらどうなったかと言うと、「神のことばを大胆に語りだし」ていました。支配されているものによって、行動が生み出されるのです。もっとわかりやすいのは、エペソ5：18に「また、酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。」と書いてありました。パウロがここで言わんとしていたことは明白でした。彼はお酒に酔うということと、御霊に満たされるということを対比していたのです。人がお酒に酔ってしまえば、その人はお酒によって支配されるようになるのです。そうしたら、その人は普段しないような言動を取ることがあります。だからパウロはお酒に支配されるのではなくて、御霊に満たされることを求めています。ほかの何かによってではなくて、御霊によって支配されて歩いていくことを人々に命じていたのです。

こうして幾つかの箇所を見ていけば、とても大切な原則を見て取ることができます。それは、自分たちのうちに満ちているものによって、外側の行動が支配されるということです。もっと言うのであれば、何で心を満たしているかによって、私たちの歩みは左右されてしまうということです。思い返してみれば、イエス様も似たようなことを口にしていました。ルカ6：45に「良い人は、その心の良い倉から良い物を出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を出します。なぜなら人の口は、心に満ちているものを話すからです。」とあります。心に満ちているものが外側に出てきます、だとすれば、私たちが何で自分の心を満たしているのかが非常に重要な問題になります。間違っただけで満たされていれば、当然間違っただけの振舞いが現れるようになります。怒り狂っていたあの律法学者たちのように、怒りで満ちていれば、それに伴った間違っただけの行動が出るのです。主を喜ばせる者として歩いていこうとするのであれば、主に喜ばれるものによって満たされて、私たちは支配されていく必要があるのです。

では、私たちは具体的に何によって満たされる必要があるのでしょうか？もちろんそのこともパウロはよくわかっていました。もう一度コロサイ1：9に戻っていただくと、パウロは「どうかあなたがたが満たされますように」とは祈っていなかったのです。彼は「どうか、あなたがたが……神のみこころに関する真の知識に満たされますように」と祈っていました。「神のみこころに関する真の知識」で、完全にいっぱいになるようにと願っていたのです。

▷「神のみこころ」

では、この「神のみこころに関する真の知識」とはいったい何なのでしょう？これも分けて考えてみると、まず「神のみこころ」ということばが使われていました。これは信仰者が頻繁に使うことばの一つで、私たちもよく口にしているかもしれません。これから先、自分が何をすればよいのかわからないので、今神様のみこころを求めていますとか、自分の将来に関する神様のみこころがまだ私にはよくわかりませんとか、私たちはこうして神様のみこころというものを口にするとき、このみこころが何かしら先行き不透明で、実際にそれが起こるまでよくわからない、ある種神秘的なもののように扱っています。そして確かに聖書を見てみると、私たちにはわからない、神様にしかわからない、神様によってあらかじめ定められたみこころが存在していることも見て取ることができます。でも、パウロはそういった意味で、ここで「神のみこころ」ということばを用いていたのではなかったということです。

もっと言うのであれば、私たちが聖書を見ると、そこにもうすでにはっきりと示されてある神様のみこころを見て取ることができます。パウロはそのみこころのことを口にしていました。起こるまで

わからない、神様だけが知っているようなみこころの話をしているのではなくて、みことばに記されている、もう神様がすでに明らかにされたみこころにパウロはここで触れていたのです。そして、私たち信仰者にとって必要なみこころ、もちろん私たちは神様が先になされることを祈ることはできますけれども、この、みことばに記されているみこころを日々祈り求めていくこと、日々従っていくことが、私たちには何よりも大切になるのです。具体的に、どんなみこころがみことばの中に記されているのかと言うと、例えば私たちは聖書の中にこんなみこころをはっきりと見ることができます。Ⅰテサロニケ4：3には「神のみこころは、あなたがたが聖くなることです。」と書いていました。これが、神様が私たちに願っていること、求めていることでした。またそれだけではなくてⅠペテロ2：15には「**というのは、善を行って、愚かな人々の無知の口を封じることは、神のみこころだからです。**」とありました。私たちが善を行って、それをもって無知な人々の口を封じることは、神様のみこころであり、神様が私たちに求めているものだということです。確かに神様がなされることを期待して、まだ私たちには見えていない神様のみこころを求めていくことはできます。私たちは将来の選択肢をどうしようかと、神様の助けを祈り求めていくことももちろんできます。神様のみわざを待ち望むことももちろんできます。でもそれ以上に、私たちにとって大切なのは、もう私たちに明らかに示されている神様のみこころに心を留めることになるのです。

私たちの神様は、みことばを通して、ご自身がどのようなお方なのかをもうすでに明らかにされました。それと同時に、ご自身が私たちに対して何を求めておられるのか、何を願っておられるのかということも示しておられるのです。もしこの先、いろいろな選択肢で迷うことがあって、神様のみこころがわからないとき、もちろんそのことを祈ることはいいですが、そんなときにもし直面するのであれば、まずこのみことばに記されているみこころに目を留めて考えることです。このみこころに従っていくことです。このみことばに照らし合わせて、自分自身に問いかけてみることです。例えばどうやって問いかけるかと言うと、自分が今選択しようとしていることは、聖くなることを望んでおられる神様のみこころに沿ったものなのだろうか――。漠然としたものではありません。みこころはこのみことばに書いてありました。だから、私たちが選択するとき、考えないといけないことは、私たちがそれを選択したときに、神様の前に聖さを求める助けになるのかどうか、それに私たちが従うことができているのかを求めることです。それだけではありません。例えば、いろいろなことがあったときに、人々が見ている中で自分が今取ろうとしているふるまいや言動は、善を行うことを望んでおられる神様のみこころに沿ったものだろうか、私たちは考えることもできるのです。その自分のふるまいや言動が、その神様のみこころに沿っていないものだったとすれば、それはしないということです。こうして私たちは、神様のみこころをみことばの中にはっきりと見て取ることができます。そして私たちはこれに従っていくことが求められているのです。聖書を見てみれば、私たちの日々の歩みの中において、必要な知恵や助けを見出すことはできます。みことばを通して、神様がもうすでに明白に示されたそのみこころこそ、信仰者の歩みにとって欠かせないものになるのです。それが神のみこころでした。

▷「知識」

それに加えて、パウロはここで「**神のみこころに関する真の知識**」と言うのです。この「知識」と訳されていることばには、もともとギリシャ語の“エピグノーシス”ということばが使われていました。この“エピグノーシス”というのは、“グノーシス”ということばの頭に“エピ”ということばがくっついてできたものでした。“グノーシス”ということばは、実はいろいろなところでもう何回も登場しているので、恐らくどこかで触れているはずですが。“ギノスコ”ということばの名詞形でした。コロサイの手紙に何回も出てくるので、覚えておいてください。“ギノスコ”というのは「知る」と訳すことのできることばですが、この“グノーシス”が「知識」といったときに、これは単なる本で学んで

得たような知識のみを表すのではありませんでした。知るは知るですが、この知るというのは、経験とか関係を通して得ることのできる知識のことを表すのです。何かを自分が経験して得ることのできる知識。だれかとの関係を通して、そこで自分が得ることのできる知識。頭でっかちの知識ではなくて、自分自身の経験を通して得られる個人的な知識という意味をこの“グノーシス”ということばは持っているのです。そして、そんなことばの前に“エピ”ということばがくっついていました。“エピ”というのは、強調の意味合いを持っていることばでした。つまり、これら二つがくっついた“エピグノーシス”というのは、体験を通して味わったより完全な個人的知識のこと、ただの知識より深いものです。パウロはそのことを強調しているのです。

パウロはこうやって、コロサイの教会の者たちが神のみこころに関するその知識に満たされることを祈っていたのです。彼らが、神様が明らかにされているみこころを、ただ知識として蓄えるのではなくて、それを個人的な知識として、経験として持っていくこと、受け入れて従っていくこと、そうしてますます生き方が変えられていくことを求めているのです。単に頭でっかちになってくださいと言っていたのではありません。神のみこころに関するその知識を個人的なものとして知っていくことをパウロは願っていたのです。それこそが信仰者の歩みにとっても鍵となるものでした。

こうして神のみこころに関する知識ということばを何回も繰り返してきたのですが、これを聞いてある人は思うかもしれません。いや、私にはちょっと難しいことはわかりません、だから知識というものは私には要りません。神様に祈りながら歩んでいけば大丈夫ではないですかと。もちろん祈ることは、それぞれにとって大切なことで、欠かすことのできないものです。でもみことばは、知識は要らないとは決して教えてはいませんでした。むしろ信仰者にとって、知識というものが欠かせないものであると繰り返し訴えています。箴言 19 : 2 - 3 に「:2 熱心だけで知識のないのはよくない。急ぎ足の者はつまずく。:3 人は自分の愚かさによってその生活を滅ぼす。しかもその心は【主】に向かって激しく怒る。」とわかりやすく書いていました。またエペソ 4 : 13 - 14 を見ると、そこには知識を持たないままでいることの危険性も見て取ることができます。そこには「:13 ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。:14 それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもてあそばれたりすることがなく、」と書いてありました。もし知識がなければ、その人は自分の愚かさによって自身の生活を滅ぼしてしまうと書いてありました。何より知識がなければ、まるで小さな子供のようにいろいろなものに惑わされて、いろいろな間違っただまされて、その歩みが不安定になってしまうと言うのです。だからこそ、私たちが大人になっていくために、成長していくために知識というのは必要不可欠なものでした。信仰者にとって神様のみこころに関する個人的な知識に満たされるということは、主に喜ばれる者となっていくのに、重要な、欠かすことのできない要素だったのです。

▶「霊的な知恵と理解力」

そうやって私たちがみことばを通して示されている神のみこころを知って、心はその知識に支配されていけば、その心はその知識でいっぱいになっていけばどうなるかと言うと、その人はそれによって影響を受けて、主に喜ばれる者へと変えられていくのです。最後にその点をさらに強調するために、こんなことばをパウロはつけ加えていました。9節に戻ってみると、「どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように」と書いています。「あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって」と出てきました。いったいパウロはここで何を言わんとしたのでしょうか。「霊的な知恵と理解力」、これらはほとんど同義語のような感じで使われています。簡潔に言うのであれば、「霊的な知恵」というのは、みことばの中に記された教えや原則、それを吟味して読み取る能力のことです。それと付随するのが「理解力」ですけれども、これはその読み取った教えと原則を理

解して、自分の生活に実際に適用する能力のことを言うのです。パウロはそんな知恵や理解力をコロサイの兄弟姉妹のために祈っていたということです。彼らがますます知識に満たされていくときに、その知識を正しく理解して、それを実際に生きていくということ。そして実際に生きていくことを通して、彼らが主に喜ばれる者へと変えられ続けていくことを願っていました。知恵と理解力も主に喜ばれる者として成長していくのには欠かせないものとして挙げられていたのです。これは当たり前かもしれませんが。私たちも同じです。信仰者がみことばを読んだときに、みことばの真理を正しく理解できれば、それに基づいて正しい判断ができるようになるのです。正しい判断ができるようになれば、間違いなく神様に喜ばれる選択ができるようになります。そうなれば、神様に喜ばれる者へと変えられていくのです。

マッカーサー先生も9節をまとめたときに、こんなことを述べていました。「信じて、従順に聖書を学ぶことは、神様の御心を知ることにつながります。そのような知識で満たされた心は、神様になつた行動の一般原則を理解することもできるようになります。その知恵は、それらの原則を人生の状況にどのように適用するかも理解することとなります。このような進歩は、必然的に神様に喜ばれる性質と歩みをもたらすことになるわけです。」と。神様のみこころが記されているみことばを読んで、その知識で心を満たし、知恵と理解力をもってその真理を実際に生きていくことによって、私たちはますます変えられていくのです。パウロはそのことをコロサイの兄弟姉妹のために祈っていました。「どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように」と。

これは私たちも同じです。私たちも最初は神様のみこころが何なのかわかりませんでした。もっと言うのであれば、生まれながら罪に死んでいた私たちは、御霊を持っていなかったがゆえに、みこころを知ることでできずでした。Iコリント2：14に「生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。」と書いてありました。かつて私たちにとっては愚かなことでした。でも、そんな私たちのうちに神様が働いてくださって、恵みによって救われた私たちには聖霊なる神様が与えられたのです。そして、この方の働きによって、私たちは次第に自分のこととして、神様のことばを理解することができるようになりました。そしてそれによって変えられ続けてきているのです。神様が私たちのうちに働いて、私たちを変え続けてくれています。そんな歩みというのは、今もう終わったわけではありません。私たちはもうゴールに到達したわけではありません。私たちは続けてそれをなしていくことが必要になるのです。コロサイの兄弟姉妹たちと同じです。

では私たちはどのように歩んでいくべきなのでしょう？私たちにとって何よりも大切なことは、いつも神のみこころに関する知識に満たされて歩んでいくということです。言いかえるのであれば、神様が私たちに与えてくださったみことば、この聖書と、私たちが時間をともにし続けるということです。もし私たちが神様に喜ばれる者として歩んでいきたいと願っていながらも、神のみこころを知るために必要な聖書と時間をともにしていないのであれば、聖書を読んでいないのであれば、当然そこには成長などありません。主に喜ばれる者とはどんなものなのかということ、私たちが何も知らずに、どうやってそんなものとして生きていくことができるでしょうか？だからこそ、私たちは真の知識に満たされて歩み続けていくことが大切になるのです。みことばに心を留めて、みことばを読むだけではなくて、みことばを覚えたり、みことばを心で瞑想したりして、私たちはみことばとともに歩み続けていこうとするのです。そして覚えておいてください。もう私たちはよく知っていることです。私たちの希望も、喜びも、この聖書の中にあります。私たちの慰めも平安もこのみことばの中に見出すことができます。私たちの信じている偉大な神様がどんなお方なのかということも、私たちはこのみことばを通して知ることができます。私たちがクリスチャンとして、神様に喜ばれる者として、どう変わっていくべきなのか、何を神様が求めておられるのか、そのことも私たちはこの中に見出すことができます。罪にあふれているこの世の中であって、いろいろな誘惑やいろいろな罪との戦いがある中であって、私たちに必要な霊

の武器もこの中に記されているのです。私たちの悩みに必要な基盤は、もうここに記されています。そして何より私たちの罪のために十字架にかかって死んでくださり、3日後によみがえられたあの救い主イエス・キリスト、この方の偉大な力も、私たちはこの中に見出すことができます。

私たちに必要なものはすべてこの中にあります。ここに私たちが主に喜ばれる者として歩いていくための力があるのです。だからこそ、このことばと時間をともにし続けていくことです。それが私たちの成長には欠かすことができません。でも同時に、みことばと時間をともにするだけではなくて、パウロがそうであったように、私たちは神様に祈りながら生きていくことが必要です。「御霊のことは御霊によってわきまえる」のだと言われている以上、私たちは常に神様の助けを祈り求めながら歩いていくことが欠かせないのです。私たちがみことばを開けてみことばを学ぶときに、理解させてくださいと神様に助けを祈り求めながら、私たちは歩いていこうとするのです。そして、私たちはそれを自分のためだけに祈るのではないということです。パウロはほかの兄弟姉妹たちがますます成長していくようにと祈っていたのです。私たちも同じことができるということです。私たち自身と同じように、皆さんの隣に座っている兄弟姉妹も成長したいからみことばを学んで、祈りながら歩いていこうとしています。だから私たちはその人のために、悪いときだけではなく、良いときも祈ることができます。あの兄弟姉妹がますます主に喜ばれる者として歩むことができるように、どうか神様、助けてあげてくださいと、ともに喜びを分かちながら祈っていくことができるということです。自分のことだけではなくて、ほかの兄弟姉妹のことを祈ることができます。そんな者として、ともに成長を目指して歩いていきましょう。